

金沢城初代城主佐久間盛政兄弟がつなぐ"縁(えにし)"の輪

氏名：櫻田 千恵子、北村 公子 職業：加賀百万石 百万歩の会 都道府県：石川県

本年の4月22日、長野市長沼公民館の皆さん30名の人達が金沢にこられました。会員の私達が、金沢城、兼六園、金沢21世紀美術館を案内しました。

今度は私達26名が長沼公民館主催のイベントに参加いたしました。多くの展示物、そして歴史作家・楠戸義昭氏による「長沼藩と佐久間一族の栄枯盛衰」という講演会、そのあと場所を妙笑寺に変えての交流会となりました。

私達がこのイベントに参加したことがこれからの誘客の一助になれば幸いです。観光振興課より送付していただいたパンフレットは他の資料と一緒に配布されました事ご報告いたします。

帰道、参勤交代の中間点・牟礼の加州・武洲道中堺に新しくできた歌碑（加賀藩12代正室の景德院が江戸から金沢に行く時この地で詠んだ歌）を見て無事金沢に帰りました。



[【長沼歴史ぐるっと散歩マップ】](#)  



ふるさとの魅力新発見・長沼徒路

長沼歴史ぐるっと散歩ガイド

城下町の面影が残る「長沼」を歩いてみよう

★「信濃なる ちくまの川の さざれ石 うずら鳴くなる 長沼の里」

遠い昔、長沼の地にお城があった。元禄元（1688）年に長沼城が取り壊されてから星霜330年程になる。

今日、そのお城は埋もれ、田畑や草木に覆われているが、今もなお、寂涼とした中に古城跡の風格を残している。静かに城跡に立ち、耳を澄ませば、遠い昔の人々の息吹が聞こえてくる。

傍らに先人の建てた長沼城址記念歌碑があり、上記★の歌が刻まれている。これは、本朝藻塩草風土記に、將軍歌合に詠み人知らずとして出ているものである。

長野市街地から北東へ向かう国道18号、愛称「アップルライン（昭和41年全線開通）」の沿線一帯、千曲川西岸に、南側から大町・穂保・津野・赤沼と細長く続く集落が「長沼」である。

平安時代は、太田荘の中にあって早くから拓けた地であり、鎌倉時代からは、島津氏が地頭として館を築いて近郷を治め、戦国時代には、松代の海津城と並んで武田氏の北信濃統治の中心であった。

江戸時代には、佐久間氏が城主（1万8千石）を務め繁栄を誇ったが、元禄元年、4代目の城主の時、徳川幕府（5代將軍綱吉）の命に従がわなかったために、長沼藩は改易（取り潰し）、長沼城は廃城となり、取り壊され、以後、幕末まで幕府の御天領（直轄地）として、とりわけ北国街道の東脇街道（通称「雨ふり街道」）の宿場町として栄えた。



武田・上杉の浪漫が甦る戦国時代の名舞台「長沼」まち歩き



1



2



3



4

- 1：長沼南端入口を守る石祠群（上町の秋葉さん）
- 2：長沼神社は武田信玄が再建。地域のシンボル
- 3：かつての宿場町の面影を残す町並み
- 4：珍しい古い外灯（昭和12年設置、長沼神社境内）
- 5：武田信玄奉納獅子頭（長沼神社所蔵）



5

雨降り街道の宿場町

長沼宿の入口の堤の上には大樫記念碑がある。そこはかつて千曲川の渡し場であった。そこから見下ろす町は、一帯にりんご畑が広がるのどかな農村地帯である。しかし、この長沼は、戦国時代には、「川中島の戦い」の前線地帯となり、武田軍は北信濃を守る要の城として長沼城を重視した。武田信玄自らも数回布陣している。

堤を下ると長沼宿上町である。南端の秋葉さんから北に伸びる街道を行くと、まず、左手に大きな長沼神社が鎮座する。諏訪系の神社で、信玄を始め、時の為政者の崇敬を集めた立派な神社である。永禄11（1568）年、信玄は長沼城の拡張強化工事とともに社殿を再建した。その時、奉納した

獅子頭が今でも残っている。

先へ進むと、越し屋根を持つ大きな家が点在する。長屋門構えの本陣や問屋が現存しており、江戸時代、宿場町として栄えた面影を残している。

この街道は、初めは牟礼宿から神代宿（豊野町）、長沼宿を経て千曲川「布野の渡し」で対岸の福島宿（須崎市）へ、そこから川田宿、松代宿を経由して屋代宿（千曲市）へ抜ける北国街道であったが、慶長16（1611）年、牟礼宿から新町宿（若槻）、善光寺宿を通る道が本街道となったため、しだいに脇街道になったという。

しかし、大雨などで丹波島宿「市村の渡し」が川止めになったとき長沼宿経由の布野の渡しが通行できたので、別名「雨降り街道」とも呼ばれたという。



2



1



3



4



5

- 1：西巖寺（毎年4月25日は蓮如忌で市が立ち賑わう）
- 2：初代長沼城主の長男佐久間勝年の菩提寺貞心寺
- 3：小高い丘に多層塔などが並ぶ長沼城跡
- 4：善導寺の鐘樓
- 5：長沼には豪華な「祭り屋台」が多く現存する（平成22年、88年ぶりに復興した六地藏町所有の祭り屋台）

神社仏閣が多い城下町

上町北端の林光院入口に道標がある。右に曲がって、栗田町に入ると、いくつかのお寺が軒を連ねる。左奥に西巖寺（浄土真宗）があり、寺内が4寺ある。

現在、長沼には14もお寺がある。ほかに移転したものの17寺、仏教八宗が揃っていたという。

「信州の小鎌倉」と呼んでもいいほど、この地に多くの神社仏閣があるのは、神仏に対する崇敬の念が篤い歴代の為政者の庇護によるものと思われる。

西巖寺を過ぎて街道を北に向かう。まもなく左手に善導寺（浄土宗）がある。立派な鐘樓があり、「善導寺の鐘」として人々に親しまれ、時を知ら

せてくれた。栗田町を北の端で左に折れて、しばらくして右に曲がると、そのあたりから六地藏町になる。白い建物の穂保研修センターを右に曲がると、貞心寺（曹洞宗）の正面に出る。

初代城主佐久間勝年の長男勝年の菩提寺で、奥に勝年の墓がある。そこから北へりんご畑の中を約150mほど行くと、小高い場所に櫻の大木に囲まれた石祠や多層塔がある。それがかつての長沼城跡で、すぐ東側は千曲川である。本丸はここより北へ約200mの所にあったと考えられている。

小林一茶がこよなく愛した文化の町

ふたたび本通りに戻り、北へ進むと内町になる。吉祥庵前には、平成13年に建てられた大きな



1：一茶門弟「長沼十哲」三人の句碑（吉祥庵前） 2：津野公会堂に建つ一茶の句碑
 3：お寺では珍しい妙笑寺の三門（長屋門） 4：妙笑寺参道にある「大洪水水位標」
 5：長沼には社寺が多い。市内に8つある延喜式内社の一つ守田神社 秋季例大祭での獅子神楽の奉納（内町の男獅子舞）

句碑がある。吉村雲士、佐藤魚淵、立花呂芳の三人の句が刻まれている。3人とも小林一茶の高弟「長沼十哲」と呼ばれる人々であり、いずれも豪農や医者、寺の住職といった裕福な人々である。その他にも一茶の弟子となった長沼の俳人たちが大勢いる。驚くことに一茶は晩年この門人宅に664日以上も逗留している。

内町は、その先で鍵の手となり、右へ曲がると守田神社に出る。守田神社は延喜式内社で千年以上の古い歴史を持つ由緒ある神社である。

千曲川水害の歴史とりんごの町

内町の北端にも道標があり、鍵の手を右に曲がると、津野に入り、妙笑寺（曹洞宗）へ向かう。

妙笑寺の三門（長屋門）には、元禄元年に取り壊された長沼城の表門の扉が保存されている。

参道脇には「戌の満水」で有名な寛保2（1742）年の大洪水をはじめ、幾多の水害で水位がどこまで漬いたのかを示す「大洪水水位標」が建てられている。「戌の満水」の際には地表より3.38mだったといわれ、水位標を見上げるとその凄さがわかる。

妙笑寺からさらに北へ進み、赤沼に入る。その入口で分かれ道になっているが、これを右手に進む。しばらくすると、広々とした赤沼公園に出る。公園を過ぎて道を左手に取る。四辻のところに赤沼公会堂があり、そこに「信州りんご発祥の碑」が建てられている。

長沼のりんご栽培は、明治末頃から始められ、

これまでにない長沼の魅力を見つけてみたい



- 1：長沼は信州りんご発祥の地（石碑）といわれる（赤沼公会堂前）
 2：立派な社叢を持つ大田神社と宮大工・彫工の武田常蔵が奉納した雄獅子
 3：数々の大水害の記録を刻む「善光寺平洪水水位標」（新幹線車両基地前）
 4：長沼の名産はりんごと子どもたちです

先人たちの優れた創意とたゆまぬ努力は、長野県第1のりんご地帯にこの地を成長させた。信州りんごはまさしくこの赤沼から始まったものといってもよいだろう。「アップルライン」沿いには農家のりんご直売店が軒を連ね、りんご狩りが楽しめる。

再び本通りに戻る。宿場南端の長沼神社に対するように、北端には立派な社叢を持つ大田神社が鎮座する。12世紀初めに再建されたとあるからその歴史は古い。

大田神社を抜け、国道18号の赤沼の信号を渡ると、左手に新幹線車両基地があり、その入口に「善光寺平洪水水位標」が建てられている。妙笑寺の水位標を基準に建てられたもので、寛保2年の大洪水水位は見上げるような高さであり、誰も

が驚く。

記録によると6.4mに達したというから驚異的な大洪水であったことがわかる。

やがて、その先で浅川の大道橋を渡ると、神代宿（かじろ豊野町）である。

ふるさとの良さは、ふるさとの人には分りにくいとよく言われる。知っているようで、ほとんど知らない身近なふるさと。

長沼をのんびり歩いて、自分だけの新しい発見をしてみても如何でしょう。⇒？！

皆さんも、もっともっと「ながめま通」になってみませんか。

（参考孫引き図書：長沼村史、長野市誌、詩心農心、信濃の一茶、歩こうしなの路、一茶を探りて、新千曲川のスケッチ）

この道があるから出会える感動。そして新しい発見。

長沼歴史ぐるっと散歩マップ

史跡巡り編

